

令和 3 年 6 月 23 日現在

機関番号：57103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00403

研究課題名(和文) クロスメディア・ボディ 戦間期アメリカン・モダニズムにおける身体の政治学研究

研究課題名(英文) Cross-Media Body--A Study in Body Politic during the Interwar Period in America

研究代表者

中村 嘉雄 (Nakamura, Yoshio)

北九州工業高等専門学校・生産デザイン工学科・准教授

研究者番号：40346739

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：アメリカの人種差別的な優生学思想は、1930年代、ナチスの台頭とその断種政策への批判、そしてニューディールの、民族の個性を重視しつつ取り込んでいく国家統一路線への政策転換の中、その影響力を急速に失っていったとされる。本研究では、帝国主義的理想身体の要であった1920年代までの優生学思想はニューディール期の流線型文化へと換骨奪胎され、30年代以降のマシンの理想的身体へと政治的に再回収されるという視座に基づき、ニューディール期アメリカのマシン文化、工業デザイン、食、モードファッション、映画、視覚芸術の幅広い文化表象をクロスメディア的に検証し、30年代の身体の政治性の再考と実証作業を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の主な学術的意義は、優生学的理想身体からニューディール期以降のマシンの理想身体への移行を当時のアメリカの幅広い文化表象から検証し、理論化したことによって、従来個別の政治文化的枠組みで捉えられがちであった二つの身体の政治性の間の理論的隙間を埋め、アメリカにおける政治的身体の歴史を補完するとともに、両者に共通する要素とその起源をより正確に検証することが可能となった点にある。この通史的視点は、現在まで続くテクノロジー社会文化、ヒューマン・テクノロジーやロボット工学の思想的起源、それらが今後向かう未来像をより正確に測定する歴史的視座を社会に提供する意味で社会的意義も大きいと考えられる。

研究成果の概要(英文)：Eugenics in America, because of harsh criticism against Nazism and its brutal racial policies in the nation, is usually considered to be gradually losing its social influence in the 1930s during the New Deal where each race or ethnicity was reassessed and remobilized as social workforce into the American society. But its powerful idea and influence toward the Empires and their "ideal" body politic at that time cannot be easily effaced. It could be also supposed that the eugenic idea and its "ideal" human body in America up to the 1920s were modified and reintroduced as "ideal" machine body politic under the New Deal's machine culture. Under the theoretical standpoint, in this study, the broad cultural phenomena during the 30s, including streamline culture, industrial design, film, fashion design, food culture and visual arts were investigated, and the theoretical validity was confirmed.

研究分野：アメリカ文学・文化表象

キーワード：クロスメディア アメリカ 優生学(優環学) 工業デザイン 表象文化 視覚芸術 ニューディール

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) アメリカ戦間期における身体論は大抵、ニューディール政策および、ナチスの人種主義政策への批判とそこから生じる民族の個性を重視し社会へ取り込む国家統一路線の観点から論じられる。しかし、世紀転換期以来、帝国の政治・社会・文化とその身体を主導した優生学が、ナチス政権との差別化を理由にその影響を完全に失ったとは到底思えない。支配的思想は、形を変えて生きながらえ、政治的に再回収されることもありうる。

事実、その可能性を示唆する研究がすでに提出されていた。スーパー・ヒューマンを作り上げる優生学の人種政策は1930年代「遺伝」から「環境」へとシフトしたというウェンディ・クラインの主張は示唆的であった[文献 1]。また、1939年ニューヨーク万博の開催に合わせ雑誌『Vogue』が特集した近未来のコスチュームは優生学的な理想身体をベースにすべて工業デザイナーがデザインを担当し、当時の既製服にも人間モデルの基準として優生学が用いた「人体測定術」が用いられたというクリスティーナ・コグデルの報告は従来の優生学的思想がニューディール期の工業デザインへ、マシーンによる身体の理想化へと換骨奪胎され受け継がれた可能性が高いことを示唆していた[文献 2]。

2. 研究の目的

(1) 研究当初の背景を受けて、本研究ではアメリカ戦間期の政治的身体を優生学(優環学)とその残響の視点で再検討し、従来の優生学的身体とニューディール期のマシンの身体との間の理論的な隙間を埋めることを主な目的とした。

(2) (1)の理論的な隙間を埋める作業には、優生学が30年代のニューディール期の政治・社会・文化、特に流線型文化へと換骨奪胎され、政治的に再回収される様式の検証も伴う。二つの異質な領域を結びつける交点を当時のアメリカ文化社会およびその歴史から広く具体的に分析・検証することも本研究目的の一つであった。

3. 研究の方法

(1) 本研究課題の理論的な前提を検証するため、19世紀以降の優生学およびマシーン文化とその政治的身体に関連するアメリカの幅広い社会文化表象のクロスメディア的分析・検証を行った。

(2) 19世紀以降のアメリカにおける「食」(アトウォーター係数、エレン・スワロウ・リチャーズなど)および「モード・ファッション」(グスタフ・イエガーのウール・システム)に注目し、これらの科学的なアプローチによる変化の歴史(マシーン化の過程)を分析した。これら二つの領域は、(政治的)身体と密接に関連する生活必需品であり科学的変容やマシーン化の影響を受けやすい。また、これらは帝国主義時代における、優生学的な理想的身体とも関連が深い。

(3) 19世紀から1930年代のアメリカにおける「食」と「衣類」の科学的変容(マシーン化)の過程上における、優生学と流線型時代の工業デザインとの交点に注目。工業デザインに入り込む、優生学的な理想身体の影響を分析した。また、30年代における工業デザインの影響は、演劇、視覚芸術、映画、万国博覧会と広範囲に及ぶことから、これらの幅広い30年代の文化表象をクロスメディア的な手法で検証・分析を行い、研究課題の理論的な前提の正当性を検証した。

4. 研究成果

(1) 1939年のニューヨーク万博開催に因んだ、モード・ファッション誌『Vogue』の未来のモード・ファッション特集において、そのファッションデザインを担当したのは当時の著名な工業デザイナーたちであった。ここに本研究の理論的前提であった工業デザインと優生学との交点に関する疑問が生じる。確かに当時の工業デザイナーは優生学的な理想身体をベースに理想的な未来のモードファッションをデザインした。しかし、そうであれば、優生学者こそデザイナーにふさわしいはずである。なぜ『Vogue』は優生学者に代わり工業デザイナーを未来のファッション・デザイナーとして起用したのか。そこに当時優生学と工業デザインを結ぶどのような交点、親和性が潜んでいたのか。この疑問について調査研究を行った結果、『Vogue』特集の工業デザイナーの多くが採用する、ゆったりとした古代ギリシア風のドレープスタイルは、19世紀後半以降のファッション・モード。つまり、従来の「美」の追求に加え「機能」も重視する傾向を踏襲したものであることが判明した。ファッションにおける「機能」の重視はマシンの「効率」「機能」を求める工業デザイナーとも相性が良い。このモード・ファッションの「機能」の重視が、『Vogue』特集で工業デザイナーが起用された理由の一つである可能性が高い。

そして、優生学と工業デザインを結びつけるさらに重要な要素が、この「機能」的なモード・ファッションが包む優生学的(理想的)身体にもあることがわかった。つまり、19世紀後半以来身体の理想化自体が「機能」化=マシーン化と同義であり、優生学的な理想身体も同様であるこ

とが判明した。これを証明するのが19世紀末、「世界健康博覧会」で発表された、生理学博士グスタフ・イエーガーの「ウール・システム」である。この「ウール・システム」は体の発汗作用機能を補助、促進し、身体に余分な水と脂肪の排出を促すことを目的とした衣服（システム）であり、後のココ・シャネルもそのモード・ファッションの素材として用いている。アメリカでは19世紀後半にいち早く製品化され、1920年代のアメリカの国民作家アーネスト・ヘミングウェイの短編にも登場する。そして、身体の「機能」化で注目すべき点が、このイエーガーの「ウール・システム」が身体を「アルブミン」、「脂肪」、「水」の3つの構成要素へ還元し、身体を機械的かつ熱機関的に科学的に再定義している点である。いわば、イエーガーの衣服（システム）、ひいてはシャネルのモードファッションも、機械論的な身体を前提としているのであり、19世紀後半においてすでに身体を「機能」=マシーンとみなす解釈が存在していたことがわかる。つまり、1939年の『Vogue』においても、ファッション・デザイナーよりも、マシーンとして身体の「機能」を熟知した工業デザイナーの方が「機能」化が一層進化した近未来のモード・ファッションをデザイン=予言するのにふさわしいのである。ここに『Vogue』が工業デザイナーを起用した背景がある。つまり、ファッションおよび身体の「機能」化=マシーニ化は当時すでにアメリカの文化歴史的なバックグラウンドとして存在していたのであり、優生学と工業デザインの二つの交点はすでに当時のアメリカにおいて準備された可能性が高いことが判明した。

(2) モード・ファッションの分析によって得られた、優生学と工業デザインとの交点、優生学的理想的身体=マシーンの身体的成果の再検証として、19世紀から1930年代までのアメリカにおける「食」とそのマシーン化の歴史、「食」=優生学=工業デザインの交点とその歴史についても検証を行った。30を超えるソース・レシピが料理本に掲載されるほどだった、19世紀前半までの豊富なアメリカの「食」文化は、モード・ファッションと同様、19世紀後半以降急速に「機能」化=マシーン化される。その好例がアメリカの「食」を近代化した1879年開校のポストン料理学校である。そこでは「科学的料理法」が追及され、その料理愛は「美味しさ」でなく、「蛋白質、炭水化物、脂肪などの整然とした機能や目をみはるような消化のメカニズム」にあった。古き良きアップルパイ、たっぷり牛乳のホワイトソース、しっとり濃厚グレービー・ソースのローストビーフも栄養素とその吸収、排泄の「効率性」が重要であり、当時の料理研究家は自分の舌よりウェスリアン大学のW・O・アットウォーターの「カロリー」計算を信奉した。いわば、イエーガーの「ウール・システム」の政治的身体と同じであり、そこにも身体を構成栄養素に還元・管理する、当時の化学的かつ合理的で、メカニカルなマシーンのボディ・ポリティクスを読むことができる。

そして優生学とのつながりで重要なのが「食」の「吸収と排泄」である。優生学的理想的身体には「食」の内容と同時にその「吸収と排泄」の「効率」性も重要であった。というのも、当時、それらの身体的機能不全から生じる便秘は民族の身体を弱体化し、その弱体化は遺伝すると考えられた病であり、その対処は帝国の存続に必須であった。エドワード・ホッパーの描く薬局の便秘薬の看板(『Drugstore』1927)はその表れであり、薬に加え便秘解消の健康本も売り上げを伸ばす。こういった便秘による病と闘ったのがジョン・ハーヴェイ・ケロッグと彼が開発したアメリカ生まれの朝食革命、ケロッグのコーンフレークである。ケロッグは優生学を信奉する学者、ビジネスマンであり、人の消化器官は栄養素とその残り滓を効率よく処理する一大マシーン=工場とみなされた。さらに、この優生学的な排泄=マシーンの身体は工業デザインとも直結する。流線型デザインが始まったのは身体や国家の効率性について国全体が取り憑かれている時であり、工業デザインの第一人者ノーマン・ベル・ゲデスの流線型、つまり、流れの中のさまざまな形の進み方の図は、「[次の]三つすべての懸念を図式化したものと解釈できる。流線型の形態が大まかにモデルとしたのは、「人間種に関する優生学的分布図」・・・煽動運動の結果として小腸内で生じる形、あるいは、流れを進む乗り物の動き」とコグデルも指摘する([文献3]135)。このように優生学と工業デザインの交点はアメリカの「食」の歴史からも確認できるのであり、1930年代優生学的理想身体が工業デザインへと換骨奪胎され、それ以降マシーンによる身体的理想化として存続する可能性を再確認できたといえる。

「文献1」Kline, Wendy. "A New Deal for the Child." *Popular Eugenics*. Ed. Susan Currell and Christina Cogdell. Athens: Ohio UP, 2002. 17-43.

[文献2] Cogdell, Christina. "Future Perfect?-The Elusive 'Ideal Type.'" *Art, Sex and Eugenics*. Ed. Fae Brauer and Anthea Callen. New York: Routledge, 2008. 239-72.

[文献3] Cogdell, Christina. *Eugenic Design: Streamlining America in the 1930s*. Philadelphia: U of Pennsylvania P. 2004.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 塚田幸光	4. 巻 第21号
2. 論文標題 「『ライフ』・ナショナリスティック-ヘミングウェイ、スペイン、ニューディール「南部」-」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『フォークナー』	6. 最初と最後の頁 108-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小笠原亜衣	4. 巻 第53号
2. 論文標題 「ヘミングウェイとバリ前衛 建築的散文、空間芸術、間身体性」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『アメリカ研究』	6. 最初と最後の頁 119-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村嘉雄	4. 巻 52
2. 論文標題 「ニューディール期における『理想』の『身体』 『人種』から『マシーン』へ（1）」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北九州工業高等専門学校研究報告	6. 最初と最後の頁 65-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塚田幸光	4. 巻 21
2. 論文標題 「『ライフ』・ナショナリスティック ヘミングウェイ、スペイン、ニューディール「南部」」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『フォークナー』	6. 最初と最後の頁 108-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小笠原亜衣	4. 巻 19
2. 論文標題 「瞬間の生、永遠の現在 “パリのアメリカ人”ヘミングウェイとバーズの移動性」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『ヘミングウェイ研究』	6. 最初と最後の頁 5-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小笠原亜衣	4. 巻 35
2. 論文標題 「若き米芸術家の肖像— 芸術家ヘミングウェイのアメリカ性」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『津田塾大学言語文化研究所所報』	6. 最初と最後の頁 35-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Yoshio NAKAMURA
2. 発表標題 "Eugenic Connection on the Western Front: Two Types of Soldiers in the First Vignette of In Our Time"
3. 学会等名 XVIII International Hemingway Conference (The American University of Paris) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yukihiro TSUKADA
2. 発表標題 "Framing/Filming Hemingway: Wartime Politics in To Have and Have Not"
3. 学会等名 XVIII International Hemingway Conference (The American University of Paris) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yukihiro TSUKADA
2. 発表標題 " Invisible Ethnicity: Faulkner and Garcia Marquez ' s Mexican Connections "
3. 学会等名 Faulkner and Garcia Marquez Conference (Center for Faulkner Studies, Southeast Missouri State University) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ai Ogasawara
2. 発表標題 "The Contradictory 'Popular Modernist': Hemingway ' s 'My Old Man'"
3. 学会等名 XVIII International Hemingway Conference (The American University of Paris) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 塚田幸光
2. 発表標題 「ニューディール・クロスメディア スタインベックと「大衆」文化の政治学 」
3. 学会等名 第57回アメリカ文学会全国大会ワークショップ「Steinbeckとアメリカ民衆文化の想像力 没後50年Steinbeck研究の現状と課題（ジョン・スタインベック協会）」（実践女子大学渋谷キャンパス）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 塚田 幸光	4. 発行年 2020年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 304
3. 書名 クロスメディア・ヘミングウェイ	

1. 著者名 加藤 幹郎、塚田 幸光（編著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 332
3. 書名 映画とジェンダー / エスニシティ	

1. 著者名 中山 悟視（編）、 塚田幸光（共著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 320
3. 書名 ヒッピー世代の先覚者たち	

1. 著者名 藤野功一、早瀬博範、高橋美知子、千代田夏夫、中村嘉雄、樋渡真理子、塚田幸光、永尾悟、山下昇	4. 発行年 2019年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 300
3. 書名 『アメリカン・モダニズムと大衆文学』	

1. 著者名 塚田幸光、清水知子、小原文衛、吉村いづみ、山本佳樹、羽鳥隆英、キンバリー・イクラベルジー、久保豊、紙屋牧子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 309
3. 書名 『映画とジェンダー / エスニシティ』	

1. 著者名 中垣恒太郎、山内圭、久保田文、中島美智子、塚田幸光	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大阪教育図書	5. 総ページ数 403
3. 書名 『スタインベックとともに 没後五十年記念論集』	

1. 著者名 小笠原 亜衣	4. 発行年 2021年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 アヴァンギャルド・ヘミングウェイ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小笠原 亜衣 (Ogasawara Ai) (60440202)	関西学院大学・法学部・教授 (34504)	
研究分担者	塚田 幸光 (Tsukada Yukihiro) (40513908)	関西学院大学・法学部・教授 (34504)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------